

論 文

臨地実習による看護学生の自尊感情の比較

瀬戸奈穂美・菅野久美子・米沢 久子・中村 風

(金沢医科大学病院)

Changes in Self-Esteem of Nursing Students through Bedside Training

Nahomi Seto, Kumiko Sugano, Hisako Yonezawa, Nagi Nakamura

Kanazawa Medical University Hospital

要 旨

臨地実習の経験が浅い2年生63名と成人看護各論臨地実習を完了した3年生56名の自尊感情と満足感について調査を行い、SEの高低による比較を行い、先行研究との検討を行うことを目的に調査を行い以下の結論を得た。

1. 本稿の対象においては、SE得点平均において2年生より3年生が有意に高い結果を得た。又、SE-L群・M群においても同様の結果を得た。
2. 満足感得点においては、2年生より3年生の方が有意に高いという結果を得た。
3. SE得点と満足感得点分布とは3年次においてはかなりの相関が見られたが2年次においては相関傾向がみられた。本稿の満足感尺度では、観点が対象にゆだねられていることから、自尊感情との関連をみる際には、達成感や、成功感など影響を及ぼすと考えられる尺度についての検討を行う必要性について示唆された。

キーワード

看護学生, 臨地実習, 自尊感情, 満足感

はじめに

臨地実習では、学生は患者-学生関係を成立させながら課題達成に取り組み、直接的な関わりの中で自己の人間関係の技能を高める機会を得ている。特に成人看護各論臨地実習では基礎実習と比べて、一人の患者を包括的に観察し援助を行う機会が多く、患者の内面に関与し、自己洞察し「対象を理解する」「受容・共感する」過程で自己に対する評価的感情に向き合うことが余儀なくされる。菅¹⁾は自己に対する評価的感情を自尊感情(Self-Esteem, 以下SE)として捉え、SEにつ

いて「健康な自己愛の持ち主は、あるがままの自分を受け入れ、それを愛でることができるので、自分自身の欠点や限界にも臆する事なく直面することができる。また、他人との関係においても必要以上に気を遣ったり、防衛的になったりせず、自分を尊重するのと同様に相手のことを尊重することができる」と述べている。筆者らは精神科臨床の実習指導を担当しているが、患者の反応に一喜一憂し過度に低い自己評価をし満足感や達成感を得られない学生や、一時の成功体験で安易に自己過信する学生達の指導をする際に戸惑いを感じ

ることが多い。自己洞察の過程で健康なSEを有していることによりあるがままの自分に適応でき満足感も得られると考え、臨地実習看護学生のSEについての研究に取り組んできている²⁾。

臨地実習看護学生の自尊感情に関する先行研究では、梶谷³⁾村上⁴⁾小野⁵⁾らの報告があるが梶谷はSEが実習により影響を受けること、高すぎる学生、低すぎる学生では患者との関係成立が困難であることを報告している。又、村上⁴⁾は第2次基礎実習における自尊感情について低SE群の実習後のSE得点の有意な上昇と患者との人間関係、医療技術の成功・失敗の体験への影響について報告している。

筆者らのグループ²⁾においても、4週間の各論臨地実習前後におけるSEと満足感の比較において、低SE群・中央群の実習後のSE得点の有意な上昇とSEと実習の満足感と有意な相関があるという結果を得ている。本稿では、臨地実習の経験が浅い2年生と臨地実習を完了した3年生のSEと満足感について調査を行い、SEの高低による比較について、先行研究との検討を行うことを目的とする。

方 法

1. 対象：調査の主旨を説明し、了承が得られた当院看護学生（1996年度2年生67名、3年生60名）。

2. 測定用具

1) SE尺度質問紙。SE尺度質問紙には、海保・山下らの尺度、遠藤らの尺度があるが本研究では、Rosenberg, M.のSE尺度を星野の邦訳に基づき日本語版に菅が応用したもの¹⁾を使用した（以下R式SE尺度）。本尺度は施行にも採点にも時間がかからず、誰にでも施行・採点が可能であり、被験者の負担も軽いという利点がある。R式SE尺度は4段階法10項目よりなる。10～40点の範囲に得点がおさまる。

2) 自作の満足感尺度。前述のSE尺度に「私は今回の実習で満足感を得、自信がもてたと感じる」の設問を満足感の指標とし追記した質問紙。4段階1項目で、「そう」を4点（以下満足感4）、「ややそう」を3点（以下満足感3）、「やや違う」を2点（以下満足感2）、「違う」を1点（以下満足感1）とし、1～4点となる。図1参照

次の項目について、あなた自身にどの程度当てはまるか、 尺度上、該当する項目に○印をつけてください。	そう	ややそう	やや違う	違う
1. 私は、全ての点で自分に満足している。	_____	_____	_____	_____
2. 私は、時々自分がまるでだめだと思う。	_____	_____	_____	_____
3. 私は、自分には幾つか見所があると思っている。	_____	_____	_____	_____
4. 私は、大抵の人がやれる程度には物事ができる。	_____	_____	_____	_____
5. 私には、余り得意に思うことがない。	_____	_____	_____	_____
6. 私は時々確かに自分が役立たずだと感じる。	_____	_____	_____	_____
7. 私は、少なくとも自分は他人と同じレベルに立つだけの価値がある人間だと思う。	_____	_____	_____	_____
8. もう少し自分を尊敬できたらばと思う。	_____	_____	_____	_____
9. いつでも自分を失敗者だと思いがちだ。	_____	_____	_____	_____
10. 私は、自分に対して前向きな態度をとっている。	_____	_____	_____	_____
11. 私は、今回の実習で満足を得、自信が持てたと感じる。	_____	_____	_____	_____

注) (1) (3) (4) (7) (10) (11)は左端が4点、(2) (5) (6) (8) (9)は右端が4点である。

(1)～(10)は菅 佐和子 看護研究 17 (2) 1984より引用

図1 R式SE尺度に満足感尺度を付記した質問紙

3. 測定時期

2年生：成人看護各論臨床実習1クール目にSE測定。

3年生：成人看護各論臨床実習最終クールの7クール目にSE測定。

4. 測定方法

SE測定後、看護学生に自己採点してもらい、各臨床指導者より看護学生にSEと得点の解釈の説明を行いSEの理解と自己洞察の機会の提供を目的にフィードバックする。

5. 分析方法

1) SEについて①各年次のSE平均得点の比較(t検定 $p < 0.05$) ②SE得点により分類した(以下SE群別)各年次のSE群別平均得点の比較(t検定 $p < 0.05$) からみる。

SEの得点の高い方から約1/3の人数を高い群SE-high群(SE-H群)、得点の低い方から約1/3

を低い群SE-low群(SE-L群)、残りの約1/3を中央群SE-middle群(SE-M群)とする。

※菅の基準¹⁾は、30点以上をSE-H群、20点以下をSE-L群としているが、SE-L群の対象が少ないため本研究では上記のように分類した。

2) 満足感の変化については①各年次の満足感得点平均の比較(t検定 $p < 0.05$) ②SE群別満足感得点平均の各年次別比較(t検定 $p < 0.05$) ③各年次の満足感得点別人数比(χ^2 検定)からみる。

3) 各年次別SEと満足感の関係については各年次のSE得点と満足感得点の分布をみる。

結 果

2年生の対象67名中有効回答は63名、3年生の対象60名中有効回答は56名であった。

1) SEの比較(表1)

表1 各年次のSE得点の比較(平均±標準偏差)

	2年生SE得点	3年生SE得点	P値
SE-L群	n=21 18.7±2.7	n=19 23.0±2.1	p<0.001
SE-M群	n=21 23.9±1.6	n=18 27.1±0.8	p<0.001
SE-H群	n=21 30.7±3.8	n=19 31.3±2.0	np
全体	n=63 24.4±5.6	n=56 27.1±3.8	p<0.005

(1)各年次のSE平均得点の比較

SEの平均は2年生24.4±5.6点、3年生では27.1±3.8点で学生間に有意差が認められ3年生の方が高かった。

(2)各年次のSE群別平均得点の比較

2年生のSE-L群は21名でSE得点平均は18.7±2.7点、SE-M群21名で23.9±1.6点、SE-H群21

名で30.7±3.8点であった。3年生ではSE-L群は19名23.0±2.1点、SE-M群は18名27.1±0.8点、SE-H群19名31.3±2.0点であった。SE-L群とSE-M群の学生間においてはt検定で有意差が認められ3年生の方が高いことがわかった。

2) 満足感の比較(表2)

表2 各年次の満足感得点の比較(平均±標準偏差)

	2年生SE得点	3年生SE得点	P値
SE-L群	n=21 1.8±0.9	n=19 2.5±0.8	p<0.001
SE-M群	n=21 2.6±0.7	n=18 2.6±0.7	np
SE-H群	n=21 2.6±0.8	n=19 3.1±0.7	p=0.03
全体	n=63 2.3±0.9	n=56 2.7±0.8	p<0.007

(1)各年次の満足感得点平均の比較

満足感得点平均は、2年生2.3±0.9点、3年生2.7±3.8点で学年間に有意差が認められ3年生の方が高かった。

(2)SE群別満足感得点平均の各年次別比較満足感

得点においては2年生のSE-L群の満足感得点平均は1.8±0.9点、SE-M群は2.6±0.7点、SE-H群は2.6±0.8点であった。SE-L群とSE-H群の学年間においてt検定で有意差が認められ、3年生の方が高いことがわかった。

表3 年次別満足感人数の比較

	満足度1 違う	満足度2 やや違う	満足度3 ややそう	満足度4 そう	合計
2年生	14	18	28	3	63名
3年生	3	17	28	8	56名
合計	14名	35名	56名	11名	119名

χ^2 検定 $\chi^2=9.02$ $0.01 < p < 0.05$

(3)各年次の満足感得点別人数比 (表3)

2年生と3年生の満足感人数比は表2のとおり

であり χ^2 検定で学年間の有意差が認められた。

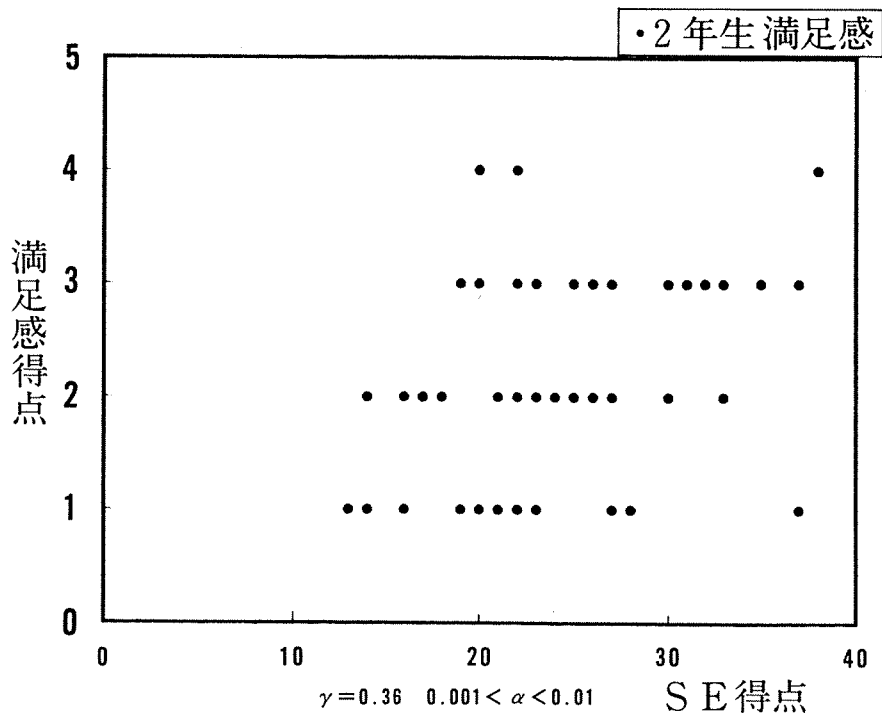


図2 2年生SEと満足感相関

3) SE 得点と満足感得点分布は図 2, 3 のとおりであり, 関連については 2 年生は $\gamma = 0.37$ でや

や相関が見られ 3 年生では $\gamma = 0.42$ でかなりの相関がみられた。

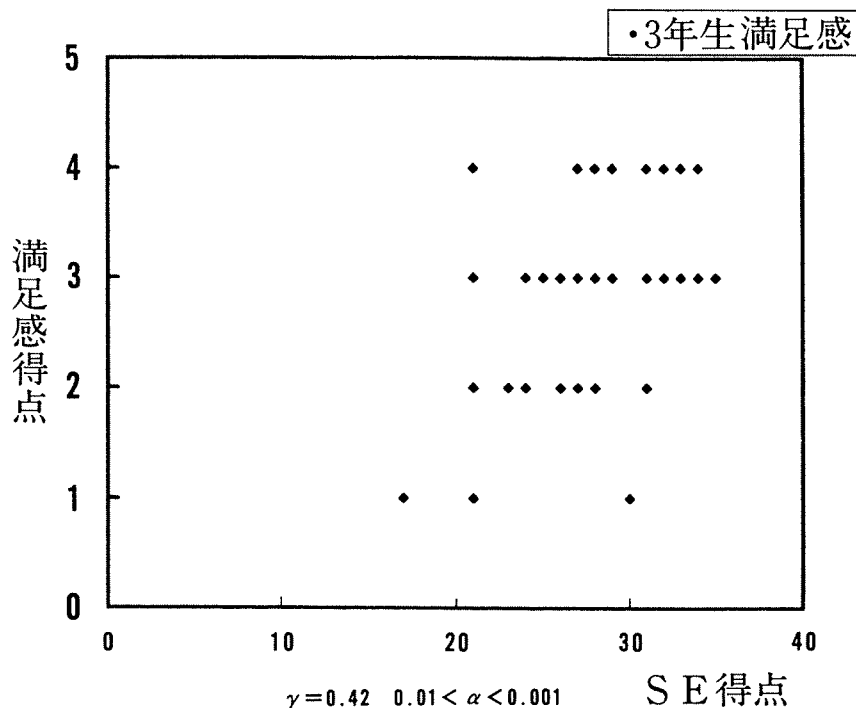


図3 3年生SEと満足感相関

考 察

1. SE の比較

当院の看護学生のSE平均得点は2年生 24.4 ± 5.7 点, 3年生 27.1 ± 3.8 点で, 菅の調べ⁶⁾の高等看護学校群のSE平均得点 25.3 ± 5.5 点と差異なく青年期の一般的な高さに位置しており健康な自己愛を有していると考え。3年生におけるSE平均得点では私立医科大学学生群女子のSE平均得点 28.4 ± 4.4 点と差異がない結果が得られた。

学年別のSE得点平均では2年生より3年生の方が有意に高く, SE群別SE平均得点ではSE-L群・M群の学生のSE平均得点において2年生より3年生の方が有意に高い結果を得た。新井⁷⁾の調べでは, SEの学年差と自我同一性職業との関連については, 学年別の有意な差はなく, 3学年とも同様の自尊感情を持っていることが報告されている。今回の結果で学年差に有意差がみられていることは, 新たな見解であるが, 本研究対象の学生集団の持つ特性とも考えられ, 対象を同一集団とし年次別変化を検討すること, さらに他教育機関との差異がないか検討し, 自我同一性と早期完了が高いと言われている看護学生群に限る特徴なのかに

ついて明らかにしていくことの必要性が示唆された。又, 遠藤ら⁸⁾は家族関係, 特に親子関係がSEに影響を与えることを述べているが, 臨地実習だけに注目するのではなく, 青年期がアイデンティティ確立の時期であることも考慮し, 自我状態や発達段階, 学生集団の持つバックグラウンドなど近年の青年期の特徴をも含め検討していくことが必要だろう。さらに, 臨地実習のSEへの影響については村上³⁾の報告の患者との人間関係・医療技術の成功・失敗の体験の自尊感情の影響などの要因を考え, どのような臨地実習経験の積み重ねがSEに影響しているかについて検討していくことにより, 明らかにしていきたいと考える。

SE群別SE平均得点ではSE-L群・M群の学生のSE平均得点において2年生より3年生の方が有意に高い結果を得たのに対し, SE-H群については, 学年間に有意性は認めなかった。SE-H群はすでに高いSEを有しており, それ以上の上昇化については限界があるためと考える。

2. 満足感の変化

2年生の満足感平均得点は 2.3 ± 0.9 点であり, 3年生の満足感平均得点は 2.7 ± 0.8 点であり3年

生の方が有意に高かった。満足感を高める因子については大宮⁹⁾は、人間関係が満足感にもっとも影響していると述べており、さらに、臨地実習では精神運動領域の学習より情意領域の学習が満足感を得れることを示唆している。又、山下¹⁰⁾は臨地実習における学生の満足度と実習評価との関連について学生の援助によって患者のADLの拡大が図れたり、闘病意欲が引き出せた時には実習への満足や看護する喜びも得られ、実習成果の評価も高いと述べている。当院の看護学生においては成人看護各論実習において一人の患者を包括的に観察し援助を行うことが基礎実習と比べて多く、患者の内面に関与し情意領域の学習を多くしていると考えられ、3年生の方が満足感が高いことに影響していると考ええる。又、SE群別満足感平均得点ではSE-L群とSE-H群において3年生の方が有意に高い結果が得られた。これに対しSE-M群では満足感平均得点は両学年とも同じであり、有意性は認めなかった。このことから、学年別の全体の比較では3年生が有意に高いことを合わせると、SE-L群・H群の満足感平均得点の上昇が全体の満足感得点平均の上昇に影響していることが考えられる。ただし、菅¹⁾は自己評価感情の低すぎる個人は劣等感や自己嫌悪感が強く、対人関係の中で不適応感を抱きやすく、逆に高い個人は現実吟味力の欠如や過剰補償などの問題を持つと述べており、SE群別の満足感得点平均について検討する際は得点差だけで判断するだけでなく、実習場面での患者との具体的な人間関係において自己洞察の過程を分析することや他の心理測定法などと合わせて検討することなどが今後の課題と思われる。

3. SE得点と満足感得点分布とには3年次においてはかなりの相関が見られたが2年次においては相関傾向がみられる程度であった。満足感と自尊感情との関連についてはこれまで筆者らのグループでは健康なSEを有することで満足感や達成感を得られる実習ができることを目指し検討を重ねてきた。本研究で用いている満足感尺度は、SEと同時に測定でき同じ心理状況下での検討は行えるが、その観点は、学生の判断にゆだねられており個人による差が予測され全てが反映されているとはいえない。遠藤⁸⁾や小野⁴⁾も述べているがJames, W.の見解によると自己評価の感情は、自己に対する満足及び不満とも捉えられ、自尊心=成功/願望で表現されるという点から、満足感の内容について吟味し、達成感・成功感等、観点を絞った満

足感尺度について検討していくことが必要であると考える。

まとめ

臨地実習の経験が浅い2年生63名と成人看護各論臨地実習を完了した3年生56名の自尊感情と満足感について調査を行い、SEの高低による比較について、先行研究との検討を行うことを目的に調査を行い以下の結論を得た。

1. SE得点平均において2年生より3年生が有意に高い結果を得た。又、SE-L群・M群においても同様の結果を得た。
2. 満足感得点においては、2年生より3年生の方が有意に高いという結果を得た。
3. SE得点と満足感得点分布とには3年次においてはかなりの相関が見られたが2年次においては相関傾向がみられた。本稿の満足感尺度では、観点が対象にゆだねられていることから、自尊感情と関連をみる際には、達成感や、成功感など影響を及ぼすと考えられる尺度についての検討を行う必要性について示唆された。

謝 辞

本研究を進めるに当たりご指導いただいた神戸大学杉野欽吾先生、調査にご協力いただいた金沢医科大学付属看護専門学校看護学生の皆様に心より感謝いたします。

文 献

- 1) 菅佐和子：SE (Self-Esteem) について、看護研究, 17(2), 117-123, 1984
- 2) 菅野久美子, 他：看護学生の自尊感情の変化—臨地実習生実習前後のSE変化および満足感との関係—, 第28回日本看護学会集録(看護教育), 129-131, 1997
- 3) 梶谷佳子, 他：学生の自尊感情と臨床実習における患者—学生関係の関連, 第26回日本看護学会集録(看護教育), 85-87, 1995
- 4) 村上静子, 他：第2次基礎実習に伴う学生の自尊感情の変化—看護学基礎実習効果調査(2), 京都市立看護短期大学紀要, 17, 75-80, 1992
- 5) 小野幸子, 他：自尊感情の低い学生の臨床実習指導—Self-Esteemスケールを用いて—, 筑波大学医療技術短期大学部研究報告, 11, 17-32, 1990
- 6) 菅佐和子：大学生のSelf-Esteemについての実証的研究(1), 愛知医科大学医学会雑誌, 8(1),

- 77-81, 1980
- 7) 新井明美, 他: 看護学生の自我同一性職業について—ストレス対処行動と自尊感情の視点から—, 第21回日本看護学会集録(看護教育), 209-212, 1990
- 8) 遠藤辰雄, 他: Self-Esteemの研究, 九州大学教育学部紀要(教育心理部門), 18(2), 53-65, 1974
- 9) 山下満子, 他: 臨床実習における学生の満足度と実習評価との関連(第2報)—学生の自己評価と患者状況をふまえた指導のあり方—, 京都市立看護短期大学紀要, 19, 61-70, 1994
- 10) 菅佐和子: 大学生のSelf-Esteemについての実証的研究(2)Self-Esteemと質問紙法性格検査に対する反応との関連性について, 愛知医科大学医学会雑誌, 8(2), 141-147, 1980